『家の光』北海道版 2010 年 11 月号

花畑からの発信

熊谷 留夫さん（上川管内美瑛町）

十勝岳連峰を間近に望む美瑛町の丘陵地帯に、春から秋にかけて 30 種類ほどの草花が咲き乱れる「展望花畑 四季彩の丘」。ここをつくりあげたのは、一人の農業者だ。美瑛に観光客を呼び寄せ、農産物のすばらしさを伝えたい。11 年前の思いが、いま、実を結ぶ。

花畑（**写真右**）の広さは約 7 ha。大型バスやマイカーがひっきりなしに訪れ、園路を散策してカメラを向けたり、トラクターバスの「ノロッコ号」で園内を巡ったりする人たちでにぎわう。

90ha の畑を作り、ペンション経営のかたわら、「展望花畑 四季彩の丘」を切り盛りしてきたのは、ＪＡびえいの理事も務める熊谷留夫さん（58）。農業部門は息子たちに任せ、この花畑の維持管理や経営業務などに奔走する。

「四季彩の丘」は入場料を取らない。入り口に募金箱を置き、維持管理のための協力を呼びかけるだけ。管理運営の費用は、売店やレストランの売り上げ、「ノロッコ号」の乗車料金などで賄う。

「入場料をもらうほうが経営は改善するけれど、きれいな花を多くの人に見てほしいからね。今年の来場者数は 65 万人を超えるでしょう。口コミで増えています。『去年のほうがきれいだったね』とお客さんから言われないように、ぼくらも前向きに進んでいきたい」

と、熊谷さんは意欲的だ。その言葉には、花畑を目にしたときの感動を多くの人に伝えたい、という強い思いがにじむ。

すべてはスノーモービルから始まった

水田農家の３代目の熊谷さんは昭和 46 年、地元の高校を卒業して家業に就く。減反政策が始まったころで、田畑は合わせて８ha ほど。「大規模な農業をやりたい」という夢をいだき、離農する人の農地を取得して規模拡大を進めた。傾斜のきつい丘陵地帯は、けっして農業に望ましい土地ではない。水田と畑作の複合経営を続け、10 数年前には全面転作した。

「ペンションも花畑も、すべてはスノーモービルから始まったんですよ」

若いころ、冬場に郵便配達の仕事を請け負った。まだ除雪態勢は整っておらず、購入したスノーモービルで配達の毎日。機械いじりの好きな熊谷さんはたちまち、その楽しさにとりつかれた。丘の町を駆けめぐるうちに実力がつき、スノーモービルの全国大会に出場するようになり、じつに４回も全日本チャンピオンとなる。

精神的に緊張する大会の前には、雪国の民宿やペンションに好んで泊まった。オーナーには兼業農家も多く、その土地の話を聞いて交流を深め、リラックスして大会に臨むことができた。

「うちの畑のジャガイモを届け、新潟から米をもらって帰ってくる、という感じでね。年を取ったら、自分もペンションをやってみたくなった。そして、とりたてのアスパラやスイートコーンを消費者に食べてもらう方法はないか、と考えていたんですよ」

やがて、こうした経験が実を結ぶ。平成４年、上川管内では初のファームペンション「ウィズユー」(**写真左**)をオープンさせた。

その道のりは平坦ではなかった。

不動産業者による投機目的の農地買収が盛んだったころで、「ペンションを建てておき、売り払うんじゃないか」と疑われたりする。地元の先輩農家や友人たちが、「熊谷を応援してやれ」と農業委員を説得してくれ、開業にこぎつけた。

ペンション経営の経験はなく、独学で始めた。熊谷さんがこう述懐する。

「運営の仕方はお客さんに教えてもらいました。『いいところは伸ばしたいし、悪い点は指摘してほしい』と頼んだり、『思い出ノート』を置いて感想を書いてもらったりして、それを経営に生かしました」

母親の志恵子さん（79）らが作った野菜たっぷりの田舎料理をメインにすると、宿泊客の受けがよかった。写真が趣味の熊谷さんは、景色のいい撮影ポイントに宿泊客を案内する。シーズン中は女性の住み込み従業員を雇用しており、これまでに２人が町内の農家に嫁いだ。

現在は、長男の聡寛さん（33)、二男の寛樹さん（32）の妻たちが中心になり運営に当たる。客層は道外勢が６～７割を占め、女性客のほうが多い。

富良野や新得の農家民宿と連携し、今年は 10 校で延べ 200 人ほどの修学旅行生も受け入れる。北海道のグリーンツーリズムの草分けでもある熊谷さんは、

「視察に訪れる人から、『美瑛のように景色がよくないので…』と言われるけれど、そうじゃない。その土地の食べもので作る手料理が喜ばれるんです。ぼくは修学旅行生を自分の子どもと思って接する。真正面から話し合い、いっしょに仕事をしたり、遊ぶことでわかってもらえます」

と、力を込める。経営を軌道に乗せた秘訣はそのあたりにありそうだ。

大型ダンプを購入し５年かけて客土

ペンション開業から５年ほどたったころ、すでに花畑の構想はあった。

39 歳のときからＪＡ理事を務めてきた熊谷さんは、「都市からの観光客に美瑛の農業や農産物のすばらしさを伝え、地域の活性化を図りたい」と思っていた。

そこで、地域の人たちに花畑作りを提案。しかし、「リスクがあることはできない」と言われ、理解は得られなかった。11 年前の話である。

「それならば……」

▲熊谷留夫さん（左端）と「四季彩の丘」スタッフ

ペンションに近い、傾斜のきつい粘土質の畑を購入し、食用油用のヒマワリを植え、ソバやキカラシを試験栽培した後、平成 13 年に「四季彩の丘」をオープンさせる。

花作りの経験はなく、粘土地とあってうまく生育しない。そこで、５年かけて客土をすることに。冬場に大型免許を取得した熊谷さんは、ダンプカーを購入し、観光客のいない朝と夜、自分の山から土を運んだ。きめ細かに園路をめぐらせ、雨水の排出や草花の防除作業が楽にできるよう工夫も凝らしてきた。

最初は花屋の意見をもとに直播きしたが、きれいに開花しない。翌年、ハウスを建て育苗することにした。ドライフラワーの店をやっていた近所の白田なつ子さん（55）を園芸部長に迎え、苗作りを花担当してもらっている。

春のチューリップやムスカリに始まり、初夏のルピナスやシャクヤク、真夏のラベンダー、秋のキカラシ……などと、とぎれず花を咲かせる。開花期間の長い花がそれに彩りを添え、訪れる人たちを楽しませる。19 年度には日本観光協会の「花の観光地づくり大賞」に輝いた。

美瑛の農産物に愛情をもち、地域でお金がまわるように心がける。自分の農場で生産できないメロンや牛乳などは信頼できる農家のものを販売し、レストランでは冷凍食品を使わない。人気のコロッケは、自家産ジャガイモを町内の食品工場に持ちこみ、味つけも指定する。

「価格はほどほどで、おいしいものしか売りません。電話やＦＡＸによる農産物の注文も増えていますが、何千万円売っても未入金は一件もないんですよ」

と、胸を張る熊谷さん。町のアンテナショップとしても定着した。「きれいな花と、おいしい農産物を多くの人に伝えたい」という夢はいま、実現しつつある。

「（ＪＡが開設した）『美瑛選果』が窓口になることで、『美瑛の農産物を使いたい』という食品メーカーが現れている。農家もＪＡも、もっと消費者に発信しなければなりません。おいしく食べてもらう方法は、きっと見つかりますよ」

地域の再生に向けた熊谷さんの“花畑からの発信”はまだまだ続く。

展望花畑 四季彩の丘

平成 13 年、㈲ウィズユー（熊谷留夫代表取締役）を設立。４月下旬から 10 月下旬まで鑑賞できる。園内では「ノロッコ号」やカート、バギー（夏期）、スノーモービルなど（冬期）を運行（いずれも有料）。売店やレストランも併設し、社員・パート従業員あわせて 46 人で運営する。

上川郡美瑛町新星第３

☎&Fax　0166-95-2758　　http://www.shikisainooka.jp/